

アフターコロナの温泉地を考える 大國道夫

1.新型コロナウイルス禍（COVID-19）をめぐる動向に際し感じる事、考えたこと。

分断と癒し

新型コロナ感染防止のための国境、都市、地域、施設における閉鎖と分断は人々の孤立を生みポストコロナの社会においても新たな日常として継続されていくことが予想される。そのような閉鎖や分断は個人個人の警戒心を呼び起こし、常に緊張を強いることになる。交流はITテクノロジーによって代替される。レストラン、会議室、アリーナなどでの交流も制限される。しかし人々は直接的な交流の機会を求め癒しを求めている

世界の感染防止の動向を見ると中国、ベトナム、台湾などでは抑えこみに成功し、アメリカやヨーロッパ諸国では感染拡大が続いている。これらの動向は国家としての強力な統制か民主主義国家の自由かの選択の問題ともなっている。個人の自由を認めれば感染拡大が続き、個人の自由を制限すれば感染が防止できるという構図にも見える。しかし民主主義を犠牲にすることはできないとすれば個人の自由を守りながら感染防止する手立てを講じなければならない。そのためには個人個人が守るべき共通のルールを科学的知見によって定めそれを自主的に実行して行くほかない。自主的に実行ができるかどうかはその国や地域によって育まれてきた固有の文化や日常生活の習慣とその基準となっている「型」が基本となってくる。日本の生活習慣である靴を脱いだ生活や日常的な手洗い、人との付き合いの方法などである。また清潔を保つための入浴の習慣もこれらの要素の一つである。入浴の習慣は同時に人々の緊張を和らげる癒しの方法としても有効であり。さらに通常時の温泉旅行などによる気分転換もこれらに該当する。

2.日本の温泉の今後のあり方

顔の見える温泉地

ポストコロナの新たな日常における癒しの場所として温泉地を位置づけることができる。感染防止のためには温泉地と顧客の双方が合意できる共通のルールとそれに沿った自主的な行動を行うことが必要となる。大勢の団体客が一時に押しよせて大宴会を行うことは経営上の利益にはなるかもしれないが感染を拡大させる可能性がある。大浴場や共同浴場、大食堂での混雑現象も同じである。散策時の食べ歩きやポイ捨てなどマナー違反による環境悪化も同様である。これらを野放しにしないで共通のルールを設け実行するためには不特定多数の顧客だけではなく、できるだけ特定多数の顧客に変換していくことが重要である。そのためには長期宿泊、リピーターの増加、参加型顧客、会員制の顧客などの開発が重要となろう。参加型の顧客としては温泉地のファンクラブ、投資家型参加者、まちおこしNPOへの参加、リモートワークなどの新たなニーズなどが考えられる。温泉地側もそれぞれの宿泊施設や交通事業者がバラバラに動くのではなくDMO組織やNPO組織を活用した共通の取り組みルールを策定し実行していくことが求められる。そうすることによって温泉地と顧客の双方にとって顔の見える温泉地形成が可能となる。

3.健康と温泉フォーラム活動への期待や提言

ウエルネス社会実現のためのエンジンの役割

健康と温泉フォーラムは温泉医療の研究と温泉に関する広範囲な分野との連携の実績がある。全国各地の温泉地の実情調査や情報提供とユーザーの声を反映した活動を続けてきておりそれらを三朝町で実施された温泉を活用した健康づくり広域連携会議をはじめとして温泉行政へ反映させてきている。政策推進活動として温泉 利用型健康増進施設認定要件の緩和（連携型）実現への動きや新湯治活動への協力などがあげられる。今後はこれら調査情報収集、情報発信、政策提言を推し進めて幅広い分野と共同して社会全体へ広めていくためのプラットフォームづくりのエンジンとしての役割が期待されている。そこでは温泉医療、観光、まちづくり、経済、制度政策などの幅広い専門家が出入りし、具体的なプロジェクトに対応しウエルネス社会実現を目指す。①温泉関係者だけではなく広く全国紙や SNS を活用した情報発信、②全国各地のまちづくりとの連携において温泉ウエルネスのノウハウの提供③ウエルネスの基準作りと制度化などによりウエルネス社会実現へ向けたエンジンとしての役割を果たす。

4.日本の温泉の将来への課題

温泉文化の「型」と「自然との親和性」の発信

田山花袋の「温泉めぐり」は日本各地の温泉地をめぐりながらその比較、優劣などを書き綴っている。大正 14 年 8 月出版で中表紙には山と川、森に包まれた東山温泉が描かれている。各地の温泉を巡る旅は当時の交通網が限られているなかで海辺や山の間をの道を進み近隣の町や村をみながらやっとの思いで目的の温泉地へたどり着く様子がつづられている。まちや村と自然の間にひっそりと抱かれた温泉地の姿として表現されている。都市での生活を離れて自然の中での温泉地を目指す姿は交通網が発達した今日の温泉地の本質的な姿にも共通しているともいえるのではないだろうか。さらに自然と温泉地との関係については内山節と天山湯治郷鈴木義二対談集にも記載されており温泉を人間と自然とをむずびつけるものであると語っている。これらの自然と温泉との関係は日本の温泉地の文化ともいえるものであり、これからも大切にしていきたいものである。さらにこれらを活かすための方策として日本の温泉地独特の入浴方法や風通しがよく自然と一体になっている日本家屋や共同湯とまちの構成、母都市との関係なども挙げられる。これらはいわば日本文化を代表する生活の「型」ともいえるものであり、これからもこの「型」を活かした温泉地のあり方が求められるのではないだろうか。

新たな日常を可能とする自由な生活様式を「型」によって共通のルールの下に置き実効性ある温泉地利用の実現のための情報発信と都市と温泉地の連携によって実現することが求められている。温泉文化の「型」を定義し日本の文化遺産としての認定をえることによる温泉地の魅力を世界へ広めていく。